

JICA ボランティア ティア 千葉

SVニュース
第20号
10周年記念号-II

平成二十五年秋季公開講演会「浦安市の取り組み国際化」と弊会定例会を開催

恒例の公開講演会が十一月三十日(土)、浦安市国際センターにて開催されました。講師に浦安市市民経済部地域ネットワーク課 橋野 浩 課長をお迎えし、「浦安市の取り組み国際化」のご講演を頂きました。この講演会は弊会と独立行政法人 国際協力機構(JICA)の共催、千葉県、浦安市、浦安市国際センターの後援で行われました。



ご講演中の 橋野 浩 氏

橋野氏は昭和五十五年(一九八〇年)、浦安町役場に入られ、財務部、総務部を経て都市整備部交通安全課長に、平成二十五年四月に浦安市市民経済部地域ネットワーク課長に就任されています。

弊会津田正臣会長、藤松理子浦安市国際交流センター長の挨拶で開会、浦安市の国際化活動の取り組みについて約四十分間、ご講演を頂きました。浦安市はドイツ・ポーランドもあり、日本ばかりではなく世界中からお客様が訪れる国際色豊かな街であることから、そのために「浦安市国際化指針(十年計画、平成二十三年改訂)」を策定し推進中で、「外国人が住みやすい街は日本人も住みやすい」というスローガンや「多文化共生」のテーマのもとで取り組んでいることを説明されました。

ご講演要旨を第二面に掲載しましたのでご覧下さい。講演会に引き続き弊会平成二十五年定例会が開催されました。

来賓の JICA 千葉デスク 田村美由紀氏、千葉県総合企画部国際課 宮崎順紀 副主査、青年海外協力隊千葉 O B 会 浜田眞一 会長、千葉県海外協力隊を育てる会 田中保蔵 会長より自己紹介とご挨拶を頂き、議事に入りました。

平成二十六年通常総会日程
日時 五月十日(土)
十三時三十分～十六時
引き続き懇親会を予定
会場 千葉県国際交流プラザ



浜田眞一氏



田村美由紀氏



田中保蔵氏



宮崎順紀氏

本年五月の総会以降の会の活動内容、国際理解教育推進と広報活動についての補足説明、会員異動等の報告がありました。新会員紹介では出席された濱野正紀新会員の挨拶がありました。

質疑応答では、最近の出席講座数の増加の背景が話題となり、推進体制の強化や千葉デスクのご尽力によるものとの見解が示されました。また、今後の小中学校、大学、公民館等における出前講座の運用と拡大には、青年海外協力隊千葉 O B 会との連携強化を考える必要があると説明されました。

定例会終了後、レストラン「四季菜々」において懇親会が開催され、相互の情報交換が行われました。



約二年前のことですが、浦安市国際交流センターに着任後、千葉県 JICA シニアボランティアとして「千葉県 JICA の会」総会で当センターをご利用頂きました。

当時新米センター長として出席させていただいたのですが、溢れんばかりのパワーを持ち活発な活動をされている皆さまに大いに刺激された一日だったことを今でも思い出します。(ちなみに私もシニアボランティア経験者です。)

国際交流の橋渡しの場を目指して

浦安市国際センター センター長 藤松 理子

今後は老若男女を問わず幅広い年齢層の方々に活用して頂き、在住外国人や市民の方々の国際交流の橋渡しとなる施設を目指して歩んでいきたいと思っています。

お近くにお越しの際には是非イベントにもご参加ください。今後、ご経験豊かなシニアボランティアの皆様にもご協力を頂き、国際交流活動を進めることを検討したく思っております。



センター内の交流サロン

公開講演会講演要旨

浦安市の国際化への取り組み

浦安市市民経済部
地域ネットワーク課
課長 橋野 浩氏



浦安市概要

昭和三十
七年（一九
六二年）、
それまで漁
師町だった
浦安は漁業
権を一部放棄し、以後海面埋
立事業が実施され、昭和五十
五年（一九八〇年）に埋立事
業が完了すると、浦安の面積
はそれまでの約四倍になっ
た。

漁業権の放棄から今日に至
るまでに、地下鉄東西線の開
通、大型遊園施設の開業、J
R京葉線の開通などにより急
成長を遂げ、東京のベッドタ
ウン、また日本を代表するリ
ゾートエリアに変貌を遂げて
いる。

市制が施行された昭和五十
六年（一九八一年）四月に人
口約六万五千人だった人口
は、平成二十五年四月には約
十六万二千人と二・四倍に増
加し、三百人弱だった外国人
人口も三千人を超えるまでに
増加した。

また、外国人の国籍は、中
国、韓国（及び朝鮮）、フィ
リピン、米国と続き、平成二

十五年十月現在で七十四の国
と地域の外国人が在住してい
る。

市役所では、昭和六十年
（一九八五年）に国際交流担
当が配置されてから、様々な
変遷を経て平成十九年から市
民経済部地域ネットワーク課
国際交流係として、国際事業
を担当している。

浦安市国際化指針

浦安市が目指す形を示す「浦
安市基本構想」の都市像の一つ
「創造と交流で築く市民文化都
市」を目指し、平成十三年六月
に「浦安市国際化指針」を策定
し、グローバル社会に対応す
べく、市の国際化の方向性を
示した。その後計画期間の十
年が経過し、旧指針を踏襲し
つつ、社会背景を加味した、
改訂版を平成二十三年三月に
策定した。

この浦安市国際化指針（改
訂版）は、「多様な文化と人が
ともに支え創造するまち・浦



ご講演中の橋野氏

安」という基本理念のもと、在
住外国人への「コミュニケーション
支援」と「生活支援」、
「多文化共生の地域づくり」、
「国際都市としての魅力あるま
ちづくり」の四点について施策
の方向性を示している。

国際化指針に基づく取組み紹

国際化指針で示す四つの柱
について、それぞれの取組み
み状況について、主な取組み
み状況は以下の通りである。

在住外国人へのコミュニ
ケーション支援として、外国
人相談窓口の開設、行政情報
の多言語化、日本語支援教室
などを実施している。

生活支援としては、外国語
指導助手の公立小中学校への
配置や災害時の外国人支援体
制の整備などがある。

多文化共生の地域づくりと
して、地域でできる国際交
流・国際協力をPRする「浦安
市国際交流・協力フェスティ
バル」の開催や、在住外国人の
自立と社会参画の礎となる「浦
安在住外国人会」の活動支援、
そのほか浦安市国際交流協会
や浦安在住外国人会が、外国
語講座を実施し、様々な外国
語に触れる機会を創出してい
る。

国際都市としての魅力ある
まちづくりとして、平成元年
に姉妹都市を締結した、アメ
リカ合衆国フロリダ州オーラ

ンド市と各種交流を行っている
ほか、国際センターを拠点
とする国際関係事業の発信
や、浦安市の国際化の担い手
となる浦安市国際交流協会や
浦安在住外国人会への支援を
行っている。そのほか国際観
光都市の推進に力を入れてい
る。浦安市は平成二十二年に
国土交通省から「国際会議観
光都市」として認定され、外国人
観光客を含め、観光コンベン
ション開催による地域活性化
に取り組んでいる。

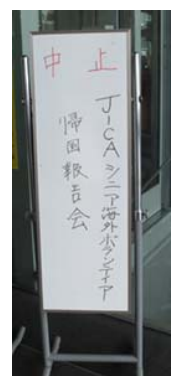
市の課題と今後の方向

浦安市国際化指針（改訂
版）をもとに、浦安市の国際
化を進めている中での課題も
ある。例えば緊急時の外国人
支援、多言語情報の発信方
法、医療通訳制度、国際セン
ターの機能強化などが挙げら
れる。今後これらの在り方に
ついて検討し、外国人にも住
みよい浦安の実現を目指して
いきたい。



講演スライドより

第十六回帰国報告会の中止 について



二月八日（土）の午後、柏
市アミューゼ柏で予定されてい
た帰国報告会は、二十年ぶり
の大雪という悪天候のため、
事故防止と交通麻痺を懸念し
て中止にいたしました。

天候の急変が予想できず、
中止の連絡が遅れ、講師およ
び来場予定の方々に大変ご迷
惑をお掛けしました。紙面に
てお詫び申し上げます。

この帰国報告会の延期ない
し取りやめなどの対応につい
ては、これから検討いたしま
すので、ご了承下さい。

予定されていた報告テーマ
と報告者は次の通りでした。

「教学相長」ドミニカ共和国で
の活動
児玉東洋氏

カリブの国、ベリーズ
濱崎 丘氏

ヤンゴンのパソコン教室でも白
シャツにロンジーが制服
高木利公氏

コスタリカの農業試験所にて
山崎 清氏

創立十周年記念号特集Ⅱ

SV ニュース第十九号で創立十周年記念号を組み、JICA地域連携課長のご寄稿、弊会歴代会長などの回想録を掲載しました。

今号は引き続き、千葉県総合企画部国際課長からのご祝詞と、弊会の主な活動である国際理解(開発)教育の推進、その支援のための広報活動や財務管理を担ってきた歴代副会長と事務局長の寄稿、および弊会のウェブサイトを創設したウェブマスターの寄稿を特集として掲載しました。

SV ニュース二十号までを振り返って

元副会長 黒田昭太郎 (在任二〇〇五〜二〇一〇)



当会発足十年、共に歩んできたSVニュースもここに二十号の刊行となりました。

これも、読者の皆様、JICAをはじめとする関係部署の支えのお蔭と深く感謝申し上げます。

二〇〇四年三月の創刊以来、当会の活動記事と国際協力情報を会員の皆様とともに広く千葉県下市町村、公民館、学校、図書館、国際交流団体などへお配りし、国際協力、JICAボランティア事業への理解を深めて頂けるように努めてまいりました。

SV ニュースは印刷を除き編集担当者の手作りで進められております。第一面の題字と地模様は創刊号担当の岡本栄一郎さんのデザインで、JICAシンボルマークの「青色」と千葉県花「菜の花」の「黄色」を取り合わせています。

変な御苦労もある中、現地の方々と共に汗を流し、深い友情や信頼関係を築いてこられた活動とともに、その経験を活かし、地域社会や学校教育の場で国際協力の重要性を啓蒙されてきた成果にあると考えております。

第二号からは、当時共同編集担当であった楠木孝雄さんの発案で題字として「SV ニュース」のタイトルを取り入れ、さらに第一面に有識者による「特別寄稿欄」を設けました。

当初、年一回の発行、A四版八ページ、表紙と裏紙のみカラー印刷で出発しましたが、会の活動が発展するにつけ、記事が多くなり、写真も多く掲載したいがため、二〇〇六年三月の第四号より年二回発行、ついで、二〇〇七年三月の第六号からA四版十二ページ、全面カラー印刷となりました。

この改善にあたって、山本茂穂さん(当時共同編集担当、前会長)が大変な尽力をされ、コストダウンも同時にはかることが出来ました。これからも、より読みやすく、より訴求力のあるSV ニュースを目指して、一層の紙面の改良が進むと期待しています。

(注) 筆者はSV ニュース第二号〜第十六号の編集を担当されました。

交流を楽しむ

元副会長 後藤 優 (在任二〇一〇〜二〇二二)



シニア海外ボランティアとしてラオスで二年半余活動して帰国後既に十年が過ぎた。

この間赴任地が近いアジアであったため個人的に交流を続けることが出来た。

千葉県郊外の自宅にラオスで親しくなった知人や留学生を迎え、成田発着時の宿を提供し、こちらがラオスを訪れる際は現地の家庭に招かれるという交流が続いた。

我が家に招くことは妻の助力がないと続けることが出来ないのです。おもてなしは妻が前面にたつ。相手側も奥様方が現地に対応してくれるの

千葉県JICAシニアボランティアの会十周年に寄せて

千葉県総合企画部国際課 課長 石川 徹



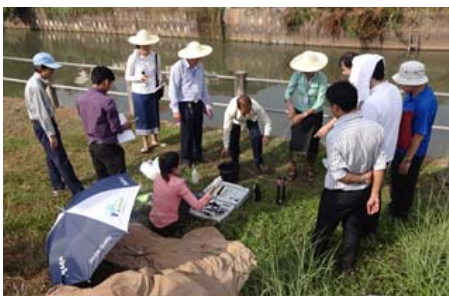
貴会の皆様には、日ごろから本県の国際協力や国際交流の推進に御尽力いただき、誠にありがとうございます。

また、このたび創立十周年を迎えられましたこと、誠にありがとうございます。心よりお祝いを申し上げます。創立以来、様々な御苦労も

あつたと存じますが、順調に活動を拡大されておりますことは、ひとえに役員をはじめ会員の皆様方の御尽力の賜物であると感じております。さて、未曾有の災害となりました東日本大震災では、世界中の国々や人々から支援物資や寄付金が、我が国に寄せられました。このような心温まる支援には今もって深い感謝の気持ちを忘れません。また、昨年九月には、二〇二〇年のオリンピック・パラリンピックの開催地が東京に決定しました。

これらの背景には、これまで皆様方が、日本の、そして千葉県の代表として、世界の各地で、慣れない生活など大

現地での水質分析実習



貴会におかれましては、今後とも、本県の事業への御理解と御協力を頂きますとともに、益々の御発展をお祈り申し上げます。

この間赴任地が近いアジアであったため個人的に交流を続けることが出来た。

千葉県郊外の自宅にラオスで親しくなった知人や留学生を迎え、成田発着時の宿を提供し、こちらがラオスを訪れる際は現地の家庭に招かれるという交流が続いた。

我が家に招くことは妻の助力がないと続けることが出来ないのです。おもてなしは妻が前面にたつ。相手側も奥様方が現地に対応してくれるの

で、妻の友人女性達がいづつも旅行に同行することになった。関心事は織物や食材や工芸品等となり、私は常に旅行準備を含めツアーガイドの役割をしている。

昨年秋には現地のフアミリーパーティーで、てんぷらや茶碗蒸し、みそ汁におにぎりといった日本の家庭料理を現地の奥様に教えながら共に作り会食を楽しんだ。

この様に、私の今の国際交流はこれといった目的はないが、シニア海外ボランティアという活動から生れた人とのつながりを大切にして楽しむことだ。

過去の会社関係とは別のこの個人の輪は現地の人達のみならず、同行する日本の友人や知人に及んで一層楽しさを増している。



会の役員を経験して
前副会長 横田勝徳
(在任二〇〇二〜二〇一三)

私は個人的事情から、平成二十五年五月十六日の通常総会にて、会の役員を辞しました。

会の役員は六年を経験し、役割は主として国際理解教育関連を担当させて頂きました。

会の活動が地域に定着し伸張するにつけ、出前講座の件数が増えて、会の地道な活動が地域に根付いていることを身を持って実感してきました。

担当の中心となった出前講座の対象は、公民館等の成人向け、小中学校の学童向け、大学での連携授業をはじめ、地域の様々な団体やサークル向けなど、大きな幅を持った対象であるため、出前講座の講師を担当された方々の苦労が察せられました。

また私自身も出前講座の講師を担当して自己の体験を整理できたこと、多くの会員の体験談を伺って海外ボランティアの意義を再確認できたことは大きな収穫であったと思います。

会の役員はボランティアであるが、その活動は交通費等の実費を頂くもの、かなりの労力と時間を要するものでした。苦勞の反面、役員ならではの活動により、多くの貴重な体験や知見を得ることが出来ました。

役員は任期は個人的な事情から様々であるが、どの会員にも一度はこの役割を担当して頂き、海外で得たそれぞれの貴重な体験や知見を、帰国後の活動により、地域に還元する機会としてください。

最後に、会のますますの発展を願っています。

広報手段としての後援申請の思い出

前事務局長 津田正臣
(在任二〇〇九〜二〇一三)



私が役員を仰せつかったのは、平成二十年五月、担当は総務であった。

平成二十二年頃から、これまでの年二回開催の帰国報告会、定例会時の公開講演会に加え、総会時の公開講演会も開催されるようになり、一般市民への広報の必要性が高まってきた。

そのため、それらの開催案内チラシを近隣の数カ所の千葉市の公民館、コミュニティセンターへ持参、掲示依頼を行ったが、JICA関係の活動であることはわかるが、県や千葉市が携わっていないとすることで快く引き受けてくれるところは無かった。

公民館の管轄部署である千葉市教育委員会に相談したところ、「県や市の後援を取得すれば問題ないでしょう」とのこと。

以後、年四回開催される「公開講演会」と帰国報告会は県に後援申請をし、そのチラシには「後援千葉県（必要に応じて千葉市、柏市なども）」としている。

おかげで県内すべての公民館、コミュニティセンターでのチラシの掲示が可能になった。さらに、千葉市をはじめ各市市政だよりや、各種新聞への掲載もしてもらえるようになった。

時には「出席したいのです。駐輪場はありますか」等の変った問い合わせもくる。ケーブルテレビの取材・放映もあった。

現在では、公民館等には「SVニュース」、「出前講座チラシ」、「当会概要」などの当会PR資料も置いてもらえるようになった。

これらにより一般市民への国際協力・異文化理解の啓発が少しでも進むことを期待している。

シニアボランティアの会の発展に寄せて

前ウェブマスター 堀端俊雄
(在任二〇〇六〜二〇〇九)



諸先輩の弛まぬご努力の賜物として発展してきた弊会も、はや十年。小生がラ

オスでのシニア海外ボランティアとしての二年間の派遣を関係者の皆さんの御支援で何とか終わり帰国したのが二〇〇四年（平成十六年）でした。

当時の上田事務局長はじめ諸先輩のお誘いで弊会に参加させて戴き二〇〇四年十二月の第二回定例会に初参加してからいつの間にか九年が過ぎました。

二〇〇六年（平成十八年）五月の総会でホームページの創設が会員より提案され、当時、「コンピュータ指導関連」で派遣されたシニア海外ボランティアの小生以外に在籍しなかった関係で担当することになりました。

試行錯誤の結果、同年十一月から試験運用に漕ぎ着け、翌二〇〇七年一月から正式に弊会のホームページとしての運用が始まりました。

(SVニュース八号に当時の経緯が掲載されております。)

会員諸兄からの多彩な帰国報告を含む各種投稿にサポートされて内容も次第に充実して行きましたが、同じ人間が長く担当するとどうしてもマンネリに陥る怖れがあり、二〇〇九年九月に後任の白鳥さんに引き継いで貰いました。

結果として新風を吹き込み素晴らしいページに成長したことは皆さんよくご存じのとおりです。

ウェブの表現技術は超高速の「時進日歩」の世界です。当会の広報活動として、一歩先を行く更なる発展を期待して止みません。

出前講座実施報告(2013年9月～2014年2月)

国際理解教育のための出前講座を弊会事業の重要な一分野として位置付け、活動を開始して以来、すでに8年を経過しました。初年度の平成18年度の5件から、翌19年度は9件、20年度は12件としいに実施回数は増大し、今年度は35件を数えるに至りました。今年度の内訳は公民館や生涯学習センターでの講座が14件、小中学校が7件、市民大学が1件、放送大学が2件、千葉大学が6件、麗澤大学が5件となっています。こうした実績は、私たちの体験を地域に還元しようとする取り組みの重要性が社会に認知されてきたことを意味するものであり、会員諸氏のご努力の結果を評価したいところであります。

また今後、講座開催を企画しておられる皆様に対しましては、ぜひ弊会の国際理解教育の出前講座をご利用下さいませよう、ご案内申し上げます。詳細は弊会ホームページをご覧ください。開催講座内容やその雰囲気などに関しましては、以下の報告をご覧ください。(文中「SV」は「シニア海外ボランティア」の略称です。)

小中学校へ出前授業

- 柏市立光が丘小学校 (2013年9月20日 中村時夫会員 「太平洋の島々と素敵なパラオの人々」)

中村会員は5年生4クラスの児童に事前に学習プリントを配布し、これをもとにJICA、パラオ、および日本との相互の関連について考えるよう、準備しました。授業は対話形式ですすめ、日米戦とその跡、日本からのODA援助の現状、算数教育の実践例として九九を指導したこと、自然や観光、現地人との交流など、スライドを用いてユーモラスに紹介しました。児童は事前学習を行い、授業態度も良好であり、講演後には多数の質問が寄せられました。=写真1



1

- 船橋市立西海神小学校 (10月2日 及川淳一、品川洋之助、川奈部くに子各会員 「世界の命と水とのかかわり」)

及川会員は4年生60人の児童に対し、水はどこから来るのかや、世界では9億人もの人々がきれいな水を飲めないことなどについて初めに紹介し、次いで品川、川奈部両会員も含めてアフリカ、中南米、大洋州などでは人々がどのように水を得ているのかを、会員の体験をも踏まえて紹介しました。また、アフリカの子供が頭に載せて運ぶ水の重さの5キログラム、10キログラム分を実際に頭に載せる体験実験や、大人が一日で必要とする水の量を1.5リットルのペットボトルで示したりもしました。=写真2



2

- 柏市立光が丘小学校 (10月3日 加藤哲男会員 「戦争となってしまったアラビアの国シリア」)

6年生140名の児童に対し、アラビア風装束をした加藤会員は、はじめにシリアについて知っていることを児童に質問し、児童の関心を引き付けた後、現在のシリアの争いの背景、人々の苦しみ、加藤会員の赴任時の平和な国の様相、交流のあったシリアの友人たちが皆、シリアを離れている現実などの話をし、平和であることの意味を問いました。児童は私語することもなく熱心に聞き入り、終了後は多くの質問が寄せられました。=写真3



3

- 柏市立豊小学校 (11月8日 佐藤 聡 会員 「モンゴルの暮らしと自然 — 子供たちの生活を中心に」)

佐藤会員は6年生3クラスを対象にまず、モンゴルの基本的情報、JICAに応募した動機、現地での仕事などを紹介し、さらに現地の生活や民族衣装、特に子供たちの生活写真や子供たちによる民族舞踊などを、多くの写真や動画で紹介しました。ノモンハン事件を引用して戦争についても触れましたが、日ソ両国は現在は恨むことなく仲良く交流しており、国際協力が相手を理解する最良の手段の一つであるとの話をしました。講演後は現地の生活や食事などに関して、多くの質問が出ました。

=写真4



4



5

● 船橋市立芝山中学校（11月15日 川奈部くに子会員 「日本人として、地球人として、一度しかない人生をどう生きるか」）

川奈部会員は、1年生3クラスの総合的な学習の時間「キャリア教育」で本授業を行いました。中学高校時代の川奈部会員の意識や夢、長じてのパラグアイやトンガ王国でのボランティア経験に基づいて、自身の海外教育ボランティアとしての活動ぶりなどの話をしました。よき日本人、よき地球人となるために今できることはなにかを問い、中学時代の夢を持ち続けることの大切さを強調しました。=写真5



6

● 柏市立富勢小学校（2014年1月17日 黒田昭太郎会員 「マレーシア・民族共存の親日国」）

黒田会員は6年生143名に対し、始めにJICAや国際協力の話、マレーシアの概要などを紹介しました。次に、仕事の内容やマレーシア人の日々の生活状況を写真で紹介し、持参した民族衣装も多数披露しました。児童は事前に国際協力の学習を行っており、静かに聴取し理解も進んだようでした。マレーシアの食べ物や生活の安全性、なぜマレーシアに行こうと思ったのかなどの質問がありました。=写真6

公民館への出前講座



7

● 酒々井町中央公民館（9月17日 渡邊要吉会員 「シニア海外ボランティア活動（エルサルバドル）」）

渡邊会員は標記公民館主催の生涯学習大学で12名の聴講生に対し、エルサルバドルでの品質管理の実際に関して2時間の講演を行いました。はじめにJICAのSV活動全般の紹介、エルサルバドルの国情、専門の品質管理などについて話し、続いて同国の人々の生活、民芸品などの特産品、食べ物やレストランの状況、電話や交通事情などの生活インフラの現状についても話が及びました。=写真7



8

● 八千代市総合生涯学習プラザ（9月23日 篠原温雄会員 「プノンペン市教育青年スポーツ局での活動報告」）

篠原会員は自己紹介とSVへの参加動機に続き、プノンペンでの公立学校の現況調査に係る活動内容を紹介しました。高校教育の予算不足や海外ドナー頼りの現状、ODAや草の根協力事業による小学校建設の実情、教育施設の地域格差などの話をしました。また、カンボジアの社会情勢、特に過去の内戦による国土の破壊が跡を残していることなどの話をしました。=写真8



9

● 酒々井町青樹堂（中央公民館主催一般講座 9月25日 影山 洵 会員 「海外ボランティア活動の現場報告とフィードバック」）

影山会員は手書きビラや多数のSV活動パネルを準備し、21名の聴講者にたいして2時間に亘って、氏が赴任したサモアとジャマイカの地での業務調整に関する活動の報告をしました。初めにJICA SVや日本のODAの説明を行い、続いて自身の活動報告、サモアとジャマイカの社会情勢や人々の生活ぶりも紹介しました。サモア観光についてのDVDも上映しました。聴講者はこれらを興味深そうに聞き入っていました。=写真9



10

● 八千代市総合生涯学習プラザ（10月28日 渡邊要吉会員 「エルサルバドル国の現状と生産・品質管理」）

渡邊会員はJICAの海外ボランティアの現状、自身の赴任地での活動などをはじめ、エルサルバドルの国情や援助の必要性など、国際協力理解に係る情報を幅広く紹介しました。同国の産業や生活インフラの現状、現地人の生活・風習や在留邦人の生活の状況、衛生、治安などについての話もしました。29名の聴講者は、特に講師が肌で感じた現地の状況に強い関心を示し、理解を深めた様子でした。=写真10

● 八千代市総合生涯学習プラザ（11月25日 川奈部に子会員「海外で教育ボランティアをして～パラグアイとトンガ～」）

川奈部会員は初めに海外ボランティア活動に興味を持った経緯や動機などの自己紹介をし、次いでパラグアイとトンガ王国での教育ボランティア経験の話をしました。特にJICA SVとして赴任したトンガの教育事情や教育制度については丁寧な説明を行いました。また、持参した民族衣装や民芸品の展示により、聴講者の現地への親近感が一層深まった様子でした。＝写真11



11

● 市原市加茂公民館（12月12日 横田勝徳会員「モンゴルにおける海外ボランティア体験」）

横田会員はシニアボランティアへの志望動機からモンゴルの国事情、歴史、自然環境、生活環境、政治、外交、経済、教育制度、宗教、文化（衣食住）など、幅広い分野を写真や持参した実物を交えて丁寧に説明しました。講師が民族衣装（デール）を持参、参加者はこれを羽織ってその暖かさを体験しました。また、豊富なスライドで紹介された現地の様子も聴講者の興味を惹いていました。＝写真12



12

● 市原市五井公民館（12月13日 高橋吉男会員「パラオと豚」）

高橋会員は写真を多用し、自身の専門である家畜飼育の話のほかに、任国パラオの国情、自然環境、生活環境、文化など、幅広く講演しました。戦争の傷跡や多数の日本人戦死者の話、スキューバダイビングのメッカ、観光立国としての現状も話しましたが、一方、米国を中心とした先進国からの援助金が欠かせない状況でもあることも話しました。聴講者からはパラオに行きたくなったとの意見もありました。＝写真13



13

● 袖ヶ浦市平岡公民館（12月14日 竹花晃会員「ヒマラヤとジャクナゲの国ネパール」）

竹花会員はSVへの応募理由が山好きであったことという自己紹介のあと、山岳博物館運営という、自身にとっては未知の仕事への挑戦経験談を披露しました。氏の任務は、博物館の事業計画作成、人材育成、マーケティング、展示品の収集計画、図書管理、売店の活性化、美化運動と、全ての側面にわたっていたこと、こうした活動の成果として入場者が2.8倍となったことなどを、美しい山岳写真を示しつつ報告しました。＝写真14



14

● 八街市中央公民館（12月18日 津田正臣会員「ヨルダンの文化・風習・習慣等について知ろう」）

津田会員は初めに、国際協力やODAの必要性とJICAを通じた日本の国際協力活動の現状を紹介し、自身のボランティア活動への参加動機、現地での活動状況などの話をしました。つぎに赴任国であるヨルダンの国事情、日本との関係、自然環境、中東との複雑な政治環境、衣食住などの人々の生活環境などの話をしました。また、現地での結婚式を例に挙げながら、平均給与や物価などの話題にも触れました。＝写真15



15

● 八千代市総合生涯学習プラザ（12月23日 北垣勝之会員「ヨルダンの現状と職業訓練および学校指導」）

北垣会員は冒頭で、中東地域のシリア問題を含めた地勢とヨルダンの王制に関わる歴史や国勢を説明しました。続いて、自身が居住したアカバの街、生活の様子を紹介し、SVとしての任務であった職業訓練校での指導の実際や課題、および協力隊員の活動状況の話をしました。また、こうした訓練校では継続的な指導が重要であることを強調しました。同国の経済・産業の現状やイスラム教を中心とした社会を写真で紹介しました。＝写真16



16



17

● 八街市中央公民館（2014年2月5日 坂出直哉会員「異国に住んで初めて分かる日本の文化」）

坂出会員は任国であるパプアニューギニアの文化と日本の文化とを比較し、なぜ日本の交通機関は時間通りに走ることができるのか、なぜ日本人は食事の前に「いただきます」、終わりに「ご馳走さま」と言うのかなど、聴講者に日本固有の文化の特性を考えさせる話をしました。講演は同国の国事情、専門の医療品在庫管理に係る現地での活動、現地の人々の生活の様子などにおよび、聴講者に好評を博しました。=写真17

大学との連携授業



18

● 放送大学教養学部（11月10日 鈴木伸一会員「ケニアの生活と健康」）

当講義は「国際協力の現場・アフリカ諸国等」の面接授業の一環として、18名の学生を対象に実施されました。鈴木会員は自己紹介・応募動機・現地での活動紹介から始まり、ケニアの地理、気候等の概説、歴史、一般市民の生活状況など、多数の写真を使って説明をしました。さらに、テロ、貧困、宗教、産業、医療、その他の個別事項についても説明を行い、聴講生からは「知らないことがたくさん分かった」などのコメントがありました。=写真18



19

● 麗澤大学外国語学部（11月20日 鈴木伸一会員「アフリカ（ケニア共和国）の生活」）

当講義は「国際交流・国際協力基礎演習Ⅱ」を受講する学生36名を対象に実施されました。鈴木会員は初めに、シニア海外ボランティア任務としてのケニア公衆衛生省での健康情報に関するデータベース構築、教育訓練について説明し、その後、ケニアの国情、国勢、テレビでは見られない生活の様子、格差社会、テロ、疾病、父系家族を中心とした社会制度等に関する説明に多くの時間を費やし、学生の興味を引きつけました。最後に、ケニアに対する国際協力の現状と支援に関する我が国の課題を提示しました。=写真19



20

● 麗澤大学外国語学部（12月4日 大久保邦衛会員「ボランティア現場で感じた国際協力の意味と大切な事柄（信頼と友情の構築）」）

大久保会員は初めに専門の水産加工でSVを目指したこと等の自己紹介を行い、赴任地のチュニジアとフィジーの歴史、生活スタイル、SV活動としての水産加工の生産管理指導や流通改善指導に関して説明しました。また、国際協力の必要性、JICAボランティアや草の根活動の現状にも触れ、こうした活動では積極的な仲間づくり、友情、人間関係が大切であることを学生に呼びかけました。学生のレポートは、国際協力に関する氏の主張がよく理解されたことを窺がわせるものでした。=写真20

国際理解教育のための出前講座のお勧めとご提案

弊会は「フィールドは世界」、「世界を学ぼう」をモットーに、小学校から大学や市民大学、生涯学習会まで、幅広い団体に対して出前講座をお勧めし、また、ご要望に沿う内容の講話を提案しております。

ご要望の趣旨や注目する国を考慮して、100名を数える当会会員中から、異文化経験豊かな最適な講師を選抜、派遣しております。

また、前もっての打ち合わせも綿密に行い、効果的な出前講座とな

るよう心がけております。

弊会が一般向け講座としてご提案しているテーマには、下記のような事柄があります。

- ・異文化、異国生活の体験
 - ・素晴らしい観光資源
 - ・海外にいてわかる日本
 - ・途上国に学ぶこと
 - ・草の根交流
 - ・国際協力とODA
 - ・技術移転の苦心談 その他
- また、小中学校へのお出前授業では

参加型授業を目指し、次のような内容を盛り込んでいます。

- ・国の位置、歴史、民族、言葉
- ・気候、習慣、宗教、食べ物
- ・産業や特産品
- ・国がかかえる課題 その他

出前講座に関するお問い合わせ、お申し込みは

Tel/Fax : 04-7173-1781 (羽田)

E-mail : toru.hada@gmail.com

会員寄稿

コロンビアのシニアボランティア体験記

（選手育成・指導法 成田市）



JICAにシニアボランティア派遣というのがある派遣に至る約一年半前のことでした。

子育ても終わり、かつて参加した青年海外協力隊の賀詞交換会に出席した折、元JICA駐在員に「今、シニアボランティアを派遣する制度があるが参加してみないかね」と言われたのがきっかけでした。その後JICAのホームページにアクセスし、要請を確認した後、英語とスペイン語の受験勉強も改めて行いました。また健康診断に際しては三ヶ月前から酒を絶って受診した甲斐あって、何とか合格し、コロンビアに派遣されることになった次第です。

さて、コロンビアと言えは日本にはあまりなじみの無い国です。成田から飛行機でコロンビアの首都ボゴタまで乗換え時間を入れるとなんと約二十四時間もかかります。面積は日本の約三倍、人口は日本の約三分の一で自然の豊か

な牧畜国家であり、公用語はスペイン語です。また、自然が険しいためインフラが整備されていない地区・地域があり、それがゲリラや麻薬マフィアの温床となり、治安の悪さの原因ともなっています。

赤道直下で季節の変化はありませんが、住む所の高度差で暑い、寒い、ちよūd良いかが決まります。首都のボゴタは標高二七〇〇mで、人口約八百万人の大都市です。

体操競技の指導は首都ボゴタを拠点として行いましたが、普及のため地方都市にもたびたび出張しました。

メデジン、カリ、ペレイラ、ソガモソ、アルメニア、カタルヘナなどです。

体操競技は男子六種目、女子四種目で選手の指導・育成には八年から十年を要します。演技を構成する技の数が膨大で一つ一つの技の習熟度を上げるのに時間が必要だからです。コロンビアの体操競



体操教室の小学生

技のレベルは世界的に見ても高いい方です。

手足が長く、素質のある選手もおり、近い将来もっと期待できるのではないかと思います。

活動は選手やコーチへの指導、助言などでしたが、その他体操に関する補助器具（鉄棒や段違い平行棒などに使用するプロテクターなども含む）の考案やスポーツ障害への対応、テーピング、マッサージなども行いました。

また、日本文化の紹介や料理を作ってコロンビア人を招いたり文化的交流も行いました。

任期中、二〇一一年三月十一日東日本大震災があり、コロンビアでもマスコミに大きく報じられました。

私のところにも朝早くから、ボゴダ体操リーグの会長や語学学校の先生、アパートの大家さんなどから心配の電話をいただきました。

いま日本が大変なことになっていて、家族は大丈夫かとの問い合わせでした。幸いにもその後家族からの連絡で自宅や家族への被害はほとんどありませんでした。

現代は、テレビやインターネットで世界の情報がどこにいても手に入ります。

しかしながら、その情報は人とのつながりがあつてこそ実感できるものです。

協力隊同様シニアボラン

ティアの体験は私にとって貴重な宝物となっています。

アルゼンチン国立水研究所(INIA)での活動から

（福島和貴 福島和貴 応用化学 四街道市）



約四十年の大学教員生活の中で国際交流の思い出は今も新鮮で、

特に南米諸国の教員、研究者や学生達との交流は印象深く刻まれている。それは係わった件数、掛けた時間とエネルギー等が多であったこともあるが、彼等の鷹揚な人柄、強い自己主張、時間感覚、歴史などの異文化を共有したことも大きな要因となつている。定年後ではあつたが自身の知識、経験が南米諸国の研究者との間で役に立つことがあればとの動機からシニア海外ボランティアに応募した。

職種「液体クロマトグラフィ分析」で派遣されたのは、アルゼンチンの Buenos Aires 州 Ezeiza にある標記の研究所 (INA : Instituto Nacional del Agua) である。同研究所では二〇〇一年〜二〇〇五年、アルゼンチンの産業公害問題の改善への貢献を目指し、化学分析と汚染評価技術に関する能力向上を目標とする「産業公害防止プロジェクト」がJICA

事業により実施され、多種の高精密分析機器類が供与された。今回の要請はそれら機器類の保守・管理・操作への指導であり、取り分け諸般の事情で長期間非使用状態にあつた液体クロマトグラフ質量分析計 (LC-MS) の再稼働が主要ミッションとされた。

派遣に臨んではLCMSに関するスキルアップと最新情報を得るためメーカーの講習会に足を運んだ。自身、ブラジルでJICAの複数のプロジェクト型事業に参加した経験から、南米諸国における精密分析機器類の保守・管理・操作に関する体制、状況について共通する理念を得ていた。

然るに活動に際しはカウンターパートには問題解決に対する自主的対応を極力求めた。この提言には理解が得られ、要請した機器メーカー技術者による再総点検、発見された経年劣化部品の購入等が実行され、LCMS本体の性能は確保された。周辺機器に若干の問題(解決には相当の経費を要する)が指摘されたがデータ取得は可能となった。ただこの段階に至るまでには本邦では考えられない途方もなく長い時間を要し、忍耐を強いられた。

精密分析機器類の本来の性能を維持するには、技能的に信頼できる人材、保守・管理に要する経費の確保、また機

器の設置条件を満たしたインフラの整備が必須な要因である。任国は南米では科学水準の最も高い国ではあるが、前述の要因には不安定要素が多い。



CTUAの実験室
後列左：筆者、同右：Ing. Luis E.Higa
CTUAセンター長

これら要因の変動が機器類の非稼動状況を招くことは、当事者も十分認識しているが、国家レベルの問題もあり早急には解決されそうにない。これらは途上国での類似の支援事業に共通する問題でもある。JICAには本派遣期間において他の機器類の機能確保に向けたフォローアップが予算化され実行された。現地

の精密分析機器類の状況を知らるものとしては的をえた施策と評価したい。
往復三時間半の通勤時間は肉体的にはきつい面もあったが、任国の社会情勢、経済、文化、人々の生活振りを体感できた良い時間で、南米の印象深い新たな思い出をもたらした。帰国後、地域に住む南米からの人達と交流を

はかっているが、今回のボラティア経験が後押ししているのは間違いない。

マーシャル諸島共和国でのシニアボランティア活動を終えて

渡辺和男
(算数・数学 千葉市)



私は二十二年度四次隊理数科教師として、マーシャルで二年間活動して、昨年三月に帰国した。

小中学校の教師を定年退職したら、第二の人生は社会のために役立ち、自分のプランで仕事ができるJICAのシニアボランティア活動をしよう、と、在職中から説明会に参加して情報を得ていた。幸運にも希望がかなえられて、三年前の三月に余震が続く成田空港を後にした。

私は首都マジュロの教育省の一員となり、教育関係全般に参加し、かつ数学科員としてマジュロ小中学校十校を訪問して児童生徒の算数数学に関する学力を調べた。そして各学校の研修日にこの結果をデータ化して先生方に知らせ、改善策を紹介した。
また、夏休業中は離島の先生方が研修でマジュロに集まるので、三週間ほど算数数

学の模擬授業を主とした研修を持った。

その他の仕事として、公開研究会の支援、ワークシヨップ、ミクロネシア三国合同セミナーの準備等があった。

マーシャルには教員養成大学がないので、教員希望者は高校を卒業したら、ハワイの大学に留学出来る少数の人のほかは、そのまま小中学校の先生になって勤務せざるを得ない。そこでマーシャルではマジュロや他の離島の先生方向けに中学校を会場にして夏期休業中に教授法の研修を行っていた。

研修を何回か重ねれば取得単位として認められ、正教員になれるシステムのためか彼らの授業態度は真剣だった。

児童生徒は学校が唯一の学び場であり、級友との交流の場でもあるので、喜んで学校に来ていた。ただ、現地の学校では米国の教科書を使っている、本格的に英語を学ぶのは小学校中学年からなので、低学年には指導がとても難しいと感じた。

私は学力調査でいろいろな学校を訪問する機会が多かったが、現地の子供たちはとても人なつっこく、笑顔で迎えてくれた。

休み時間は遊具がない校庭で、ボール遊び、なわとび、鬼ごっこ、けんけん遊び、逆立ち遊び等、戦後間もない日本ではやっていた遊びをやっ

ていた。

任期中にアルノ環礁、ミリ環礁、ジャルト環礁等に行き、環礁内の小島の学校を訪問できた。どの環礁でも教育関係者を中心に歓迎してくれ、夜間には島民が貴重な食べ物を持参で野外パーティーを開いてくれた。



環礁の子供たち

夜は真っ暗闇で、懐中電灯なしではとても歩けなかったが、晴れた夜は、南十字星をはじめ日本ではほとんど見ることが出来ない南の星座が確認できた。

それぞれの環礁には旧日本軍の沈没船、航空機の残骸や大砲等の戦跡が見られた。建築物は丈夫に造ってあって、七十年近くたった今でも、現地の人が住んでいた。

私は、今、千葉市の学校から国際理解のゲストティーチャーの要請があれば訪問している。

また、昨年十月から近くの小学校で算数の学力向上サポーターの仕事をしていて、

今でも学校教育に関わっているのは幸せだと思っ

帰国後の「草の根国際協力」

大久保邦衛
(水産物流通改善 浦安市)



昨年三月にフィジーより帰国後は、任国紹介のプレゼンテーションや研修で来日した元配属先職員たちの

アテンド等を行っています。私のフィジーでの職種は、水産物の流通改善で、農林水産省水産局ラウトカ事務所勤務しました。具体的には、魚介類の保管や輸送時の氷と容器を使用した温度管理の普及奨励でした。



温度管理の説明

漁師や流通関係者には温度管理の実技を、また管理指導に携わる水産局職員には食品科学理論や魚介類の死後変化、食中毒菌等を説明しました。水の供給体制は、日本の

援助で主要拠点にアイスプラントが配置されており、安定供給体制が出来ていました。

一方、容器の普及は遅れていました。活動後半には使用済み輸入植物油樽を利用した手作り容器の普及の動きが広がりました。これは、漁業関係者が温度管理の重要性を理解したことと、品質向上による収益改善の市場原理が作用したことによると思われる。

帰国後も配属先の人々との交流が続いています。フィジーからは、各職種の研修生が来日しますが、私が滞在した現地事務所の職員も二名来日しました。丁度七月の花火シーズンで、浦安市の花火見物にも招待されました。また、奥多摩にワサビ栽培と溪流魚養殖を見に行きました。



わさび畑見学 (奥多摩)

フィジーは、熱帯の島国です。雨が多く、山岳地帯の溪流を利用したワサビ栽培や溪流魚養殖が地域新規事業となるように期待しました。フィジーと奥多摩の溪流の水温は

ともに十五℃で、水温条件は合格でした。

配属先の若手職員たちはFacebookを盛んに活用しています。彼らが頻りにアップしてくる写真やコメントは、お互いの近況を知るのに役立ちます。私のフィジーでの任期は終了しましたが、「草の根の国際交流」は今も続いていることを感じています。

帰国後は、千葉県JICAシニアボランティアの会、JICA地球ひろば、あるいは知人からの依頼で派遣国紹介のプレゼンテーションの機会があり、スキルアップをする事が出来ました。

その中でもJICA地域連携課主催のスキルアップ講座にも何回か出席し、好評だった講演の実演や出席者間でのディスカッション、またJICA連携課が作成した「講座作りのポイント」資料は、私のプレゼンテーション作成に役に立ちました。

受講者の側に立った講座作り、そのためのPPT機能を含めたプレゼンテーション技術の導入等は、講座表現力のアップに有効でした。さらに私自身にとって、国際協力の意味や支援の必要性を整理したり、より理解したりすることに役立ちました。

現在も、インターネットによるフィジーの仲間達との交流が続いており、Small Worldを実感しています。

フェスティバルに参加

KIRA祭り

九月二十一日(土)十三時〜十五時三十分、柏市立第一小学校において柏市国際交流協会(KIRA)を構成する十二の委員会と弊会がブースを設置しました。

当日は中山睦郎柏市国際交流協会会長や窪井公輔柏市地域づくり推進部長の挨拶があり、アトラクションとして柏市立第一小学校生徒のブラスバンド演奏、在住外国人の各種ダンスが披露され三百名の来場者で賑わいました。

弊会はパネル展示、各種資料配布によりJICAボランティア応募相談を行い、羽田、白鳥、加藤役員三名と佐藤聡、黒田昭太郎会員の二名が参加し対応しました。



応募相談中

成田市国際市民フェスティバル二〇一三

十月六日十時〜十五時、成田市の成田国際文化交流館にお

いて、成田市国際市民フェスティバルが開催されました。実行委員会事務局は同市教育委員会生涯学習課で、所属する二十三団体と弊会が参加して開催されました。



チーバくん(左)とうなりくん(右)

弊会は成田地区での初参加で、パネル展示とSVニュース、概要を配布によりJICAボランティア応募相談を行い、及川、坂出、酒井役員三名、山本顧問と門間通会員が参加し対応しました。

生涯学習ボランティアフェア二〇一三

十一月二十二日〜十二月一日の十時〜一六時、千葉市生涯学習センター一階アトリウ



弊会展示ブース

ムガーデンにて、生涯学習ボランティアフェア二〇一三が同センター主催、二十団体参加で行われました。

中央図書館への来館者や他のイベント参加者を含め、約二百名来訪されました。役員の詰めた土、日曜日には青年海外協力隊経験者や、元教師の方など二十五名の来訪者があり、津田、酒井役員二名と、山本顧問が参加して対応し有意義な交流の場でした。

ちば市国際ふれあいフェスティバル二〇一四

二月九日十時〜十六時、きぼーるにて「千葉市国際ふれあいフェスティバル二〇一四」が同実行委員会主催で二十六団体が参加して行われました。

二十年ぶりの大雪で交通マヒが発生し参加できない団体もありましたが、弊会では近郊の津田、及川、品川、酒井役員と上田義晴、酒井徳子会員が頑張って来場参加し、応募相談や国際クイズでブースを盛り上げました。



大雪にもめげず出展

新SV千葉県庁表敬訪問

九月二十日(金)午後、青年海外協力隊事務局 参加促進・進路支援課 菊池智徳課長の引率で、平成二十五年度第二次隊の青年海外協力隊員(JOCV)九名およびシニア海外ボランティア(SV)荻巣芳和氏(バンングラデシユコンピュータ技術)の方々が千葉県庁を赴任前の表敬訪問をされて、千葉県 諸橋省明副知事から「相手の話をよく聞き、地域の人々の気持ちをよく汲み取って活動して欲しい」との激励の言葉を受けられました。

弊会からは津田正臣会長が同席しました。



JOCVとSVの皆さん(中央 諸橋副知事)

引き続き十二月二十四日(月)午後、青年海外協力隊事務局 三次啓都次長が引率され、二十五年度第三次隊のJ

OCV十二名およびSV 大澤トシエ氏(弊会会員、インドネシア 服飾)、小南 貴氏(ブータン 自動車整備)、大西和夫氏(メキシコ 品質管理)の三名の方々が千葉県庁を赴任前の表敬訪問をされました。

千葉県総合企画部 鶴巻郁夫部長から激励のご挨拶がありました。

派遣ボランティアを代表し、弊会再派遣会員の 大澤トシエ氏が、その抱負を述べられました。

弊会からの同席者は及川淳一副会長でした。



鶴巻部長に答礼する大澤会員

誤植のお詫び

前号第十二頁の千葉県庁表敬訪問記事において、坂本森男千葉県副知事のお名前に誤植がありました。ここにお詫びして、訂正いたします。

JICAボランティア春募集

JICAシニア海外ボランティアおよび青年海外協力隊の春募集説明会が左記のとおり開催されます。会場ではパネリストによる体験談発表や、よろず相談があります。

■三月三十日(日曜日)
十四時〜十六時

松戸会場

松戸市勤労会館三階ホール
(JR・新京成 各線 松戸駅 徒歩五分)

・シニア海外ボランティア
・青年海外協力隊

■四月十日(木曜日)
十九時〜二十一時

船橋会場

船橋フェイスタビル六階
きららホール
(JR南口・京成・東武各線 船橋駅 徒歩一分)

・シニア海外ボランティア
・青年海外協力隊

両日ともにシニア海外ボランティア、青年海外協力隊を合同で行います。申込は不要で、会場に直接お越しください。

JICA千葉デスク便り

従来、「フェアトレードイベント千葉」として開催されていましたが、今年「フェアトレードフェスタちば」の名前に



昨年の「フェアトレードイベント千葉」会場

かわりました。

「フェアトレード」は、開発途上国の産品を正当な価格で購入することで、生産者の生活を支援する取り組みです。皆さんが身近な生活にフェアトレードを取り入れることが、国際協力に繋がります。

本イベントには、主に千葉県内でフェアトレード商品が扱う団体や、大学生団体などが出店します。JICA地球広場のブースでは、世界の問題をみて、触って、学べる展示を行います。

また、ステージパフォーマンスや、スタンプを集めて景品がもらえるスタンプラリーなど、楽しい企画も予定しています。是非、会場にお越し下さい。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

<http://fairtrade-hibant.jindo.com/>

日時 五月十一日(日)

十一時〜十七時

場所 きばーるアトリウム
入場 無料
(田村美由紀)

編集後記

全国地球温暖化防止活動推進センターの二〇〇七年の報告によると、二十世紀の産業革命以降、平均気温が〇・八五℃高くなり海面が十二・二二センチ上昇したとあり、今世紀末にはさらに平均気温が一・八℃高くなり、海面が十八・五センチ上昇すると報告されています。

地球の環境は生物が生きる上で奇跡のような微妙なバランスの上に成り立っており、最近の気候変動により起こされていると思われる災害は我々に警鐘を鳴らしています。

二〇五〇年に人口が七十億人から九十億人に増加するという話ですが、地球の環境を破壊してゆく今の生活を継続する事は可能でしょうか。

地球環境を守るだけでなく、今世紀以降も生き残るための運動と技術開発の確立を目指す行動が必要とは思いませんか。シニア海外ボランティアの貢献が期待されています。(酒井國彦)

ご意見、ちば出前講座のお問い合わせは下記にお願いします。

千葉県JICAシニアボランティアの会
(The Association of JICA Senior Volunteers in Chiba)
043-253-3075 (津田)
mysuda@tbt.t-com.ne.jp

JICA千葉デスク国際協力推進員
043-297-0245 (和泉澤)
jicadpd-desk-chibaken@jica.go.jp